

平成 28 年度卒業論文

祭礼の継承と地域コミュニティのつながりの強化
—流し節正調河内音頭を事例に—

A13LA005 池田朱里

目次

I はじめに

- 1) 研究目的
- 2) 先行研究の紹介

II 河内音頭の概要

- 1) 河内音頭とは
- 2) 河内音頭の分類
 - (a) 現代河内音頭
 - (b) 江州音頭系の音頭
 - (c) 伝承河内音頭

III 流し節正調河内音頭と保存会

- 1) 現代河内音頭の席卷
- 2) 流し節正調河内音頭保存会の概要

IV 流し節正調河内音頭が地域で継承される理由

- 1) 保存会の基盤「常光寺」
- 2) 保存の意識
- 3) 地域コミュニティ

V おわりに

キーワード

祭礼、河内音頭、流し節正調河内音頭保存会、担い手、地域コミュニティ

I はじめに

1) 研究目的

毎年、祇園祭や天神祭、ねぶた祭りなどはビッグイベントとして多くの人々を魅了している。近年ではこれらほど規模が大きくはない祭りに関しても、まちおこしの資源として注目を集めるようになってきた。その一方で、祭りを支える担い手たちは人材の確保に苦勞しており、アルバイトやボランティアなど外部の人々を呼ぶことで参加者を増やしている祭りもある。

そこで、行政や企業によるものではない、地域の人々によって古くから継承されてきた祭りがどのようにして新たな人々を祭りに取り込むのか（あるいは取り込むことができなくなっているのか）、さらには祭りの運営を通じて地域コミュニティ側にもメリットをもたらすことがあるのではないかとということについて明らかにしていく。

本研究では「流し節正調河内音頭」に焦点を当て、古くから伝わる流し節正調河内音頭がどのように継承されてきたのか説明する。また、現代における流し節正調河内音頭の継承を担っている「流し節正調河内音頭保存会」による活動について説明する。そして、保存会の活動の中に芸能として維持されるための仕掛けや地域の人々のつながりを強化する仕組みがあるのかどうか分析する。

構成は以下の通りである。このあと I 章では先行研究の紹介をし、II 章で河内音頭に含まれるそれぞれの音頭の概要について、III 章で流し節正調河内音頭河内音頭保存会の活動について述べる。IV 章では流し節正調河内音頭保存会と地域コミュニティとのかかわりについて考察し、V 章でまとめを行う。なお研究にあたっては、2016 年 8 月 24 日の八尾地蔵盆踊り、9 月 11 日の第

39 回八尾河内音頭まつり、9 月 17 日の第 11 回ヤンレー節河内音頭奉納盆踊り大会の観察を行い、11 月 16 日と 12 月 22 日に流し節正調河内音頭保存会に聞き取り調査を行った。

2) 先行研究の紹介

近年の地理学の分野では、いくつかの祭礼研究がなされている。その中で盆踊りと関係するものとしては、長尾（2009）の研究がある。

長尾（2009）は、越中おわら節を事例として、近代化の過程で地域文化の再編がどのように行われてきたのかを明らかにした。その際に注目したのが

1913（大正2）年の「富山県主催一府八県連合共進会」で越中おわら節の公演が行われたことと、その後に地元住民が越中おわら節に別の踊りを振り付けたことである。富山県主催一府八県連合共進会は博覧会的なイベントであり、富山県の近代化を大きく推進することが期待されていた。そこで、近代化の中心であった臨海地域をアピールするよう、また観光の面での広告効果を得るよう、海のイメージを踊りに反映したとされる。しかし、地元住民は観客と演者が入り乱れるような身体性を核とする振付を生み出した。このことについて、プロによる展示としての踊りに反発し、そして振付で芸能の意味を操作するという点には親和して、住民が自ら地域芸能を改造したのだとしている。

また、祭礼の担い手に注目している研究としては、石川（2004）と佐藤（2016）のものがあげられる。

佐藤（2016）は、都市祭礼の継承のあり方を示すために、祇園祭の山鉾行事を対象に調査を行った。まず、各山鉾町をクラスター分析で分類し、ほとん

どが事業所で構成され町内居住の世帯の少ない山鉾町はクラスターA、住民にマンションを含めた借家世帯が多く事業所も多い山鉾町はクラスター B1、借家世帯は多いが事業所が少ない山鉾町はクラスター B2、持ち家世帯が多く居住年数が 20 年未満の新住民世帯も多い山鉾町はクラスター C1、持ち家世帯が多く新住民が少ない山鉾町はクラスター C2 とした。それから各山鉾町へアンケート調査を行い、それぞれのクラスターの特徴から山鉾町の運営基盤が多様化していることを明らかにした。また、クラスター C2 に分類される船鉾町にはさらに聞き取り調査を行い、分譲マンションの建築を期に運営基盤が「職住一体中心型」から「職住分離参加型」へ、さらに「分譲マンション参加型」へと再構築されたことを明らかにし、都市の変容にともなう運営基盤の再構築が都市祭礼の継承につながるとした。

石川（2004）は、宇和島地方の闘牛を事例として、伝統行事が存続する要因を担い手の生活や行動に注目して分析した。闘牛が生み出されたのは、

1950 年代に農業が機械化されるまでは農業に携わる住民が牛と密接な関係をもっており、強い闘牛を持つことがステータスとなっていたことと関係している。しかし、一般家庭で牛が飼われなくなると闘牛は消滅することとなった。それにもかかわらず現在まで闘牛が存続しているのは、闘牛の観光化と担い手同士の強固な人間関係によるものであるとしている。闘牛の観光化は、宇和島をアピールするために牛主たちが開催した闘牛大会がマスメディアに大々的に取り上げられたことで闘牛に再び活気をもたらすきっかけになっただけでなく、大会を組織的に運営することにもつながった。また、担い手同士の人間関係については、牛主同士の交流が盛んなことや、牛主と闘いの際に牛をけしか

ける役割をする勢子が長い年月をかけて信頼関係を結ぶこと、牛主を支えるヒイキという後援会のような組織が築かれていることなどから、闘牛を通して新しい人間関係を得ることができ、次の担い手の再生産にもつながるということが指摘されている。

このような祭礼の担い手に注目した研究というのは、社会学の分野でも行われており、近年のものとしては有本（2012）の研究がある。

有本（2012）は、岸和田だんじり祭を事例に、祭礼組織の構造や祭礼組織どうしの関係に注目し、祭礼がどのようにして成立しているのかを明らかにした。岸和田だんじり祭における祭礼組織としては「町内祭礼組織」と「連合組織」が存在する。町内祭礼組織はだんじりを曳行するためのひとつの単位であり、年齢層ごとに世話人会、若頭会、組、青年団、子ども会などの団体に分かれてそれぞれの役割を果たす。一方、連合組織は町内祭礼組織の代表が集まったもので、こちらも年齢層ごとに年番、若頭連絡協議会、後梃子協議会、千亀利連合青年団という団体に分かれている。これらの団体では個人が協力しあうだけでなく、花形とも言われるような役割を巡って競争が生まれたり、より過激なやりまわしを指向する若い担い手と安全で安心な祭りを指向する年配の担い手のように、それぞれが思う「良い祭り、良いやりまわし」を目指した競争が生まれたりする。また、町内祭礼組織と連合組織の関係性に関しては、相互依存的な関係でありつつも振る舞いによっては自分の町の立場を良くすることも悪くすることにもなるというある種の緊張関係があることが指摘される。そして、このような多元的な競争関係が組み合わさる中で、最終的には年番を頂点としたコントロールのもとに祭りの調和が達成されることを明らかにした。

II 河内音頭の概要

1) 河内音頭とは

河内音頭は、河内の地域で伝承されてきた盆踊り唄である。中でも大阪府八尾市が河内音頭の本場とされており、夏から秋にかけての祭りの時期になると、八尾市内だけでも数十カ所で盆踊り大会が開かれる。また、河内の地域内だけではなく関東地方の都市においても河内音頭の盆踊り大会が開かれるなど、多くの人に親しまれる郷土芸能である。

しかし、河内音頭が具体的にどのようなものであるのかという問いに対して、納得できる答えを出すことは難しい。なぜなら、特定の唄や節が河内音頭とされるのではなく、まったく別々の経緯で発生した盆踊り唄であっても、河内で継承されてきたものならばまとめて河内音頭と呼ばれているからである。

そこで本章では、河内音頭が多様な盆踊り唄の集まりであることをふまえて河内音頭概念を説明する右田（1978）と村井（1994）を参考にし、河内音頭分類・整理を行う。

2) 河内音頭分類

右田（1978）は、河内音頭という言葉は人によって違う受け取り方をされており、それぞれの人が日頃見聞きする中での解釈にならざるをえないと述べている。そして、河内音頭概念を新たに整理するならば、河内で伝承されてきた口説¹⁾音頭形式の盆踊り唄はすべて河内音頭であり、それらをベースにして作られた音頭も河内を拠点として演奏される限りは河内音頭であるとしている。また、大正時代に生まれた「初音節」以降の音頭を「現代河内音頭」、そ

れ以前から河内全域で無数に存在していた音頭を「伝承河内音頭」という言葉で表現している。

一方、村井(1994)は、「“河内に古くから伝承されて来た盆踊り音頭は、みな河内音頭だ”と決めつける説は妥当ではない²⁾として、河内音頭は従来から「河内音頭」と通称されてきた、あるいは通称されたことのある音頭のことを呼ぶ言葉だと捉えている。その代わりに、河内の地域で伝承されてきた盆踊り唄については、「河内音頭」ではなく「河内の音頭」という呼称を用いている。また、村井は河内音頭³⁾について独自の調査を行い、それぞれの音頭の歴史や特徴からより細かい分類を行っている。

これらを参考にし、河内音頭に含まれるそれぞれの音頭をルーツごとに分類すると、大きく3つに分けることができる。1つめは「現代河内音頭」、2つめは「江州音頭系の音頭」、3つめは「伝承河内音頭」である。

(a) 現代河内音頭

現代河内音頭とは、河内音頭の主流として現代では広く親しまれている音頭である。これまでに幾度かの変遷を遂げており、江戸時代から伝わる「交野節」、それが発展して生まれた「歌亀節」、さらに歌亀節から発展した「平野節」、そして今の河内音頭の主流である「浪曲音頭」に至るとされている(図1)。

交野節は、「七七」の上の句と「七五・七五」の下の句で構成され、上の句の最後に音頭取りが「ヨホホイホイ」という掛け声を踊り子に向かって掛けることで、上の句の終わりの合図としている。この「ヨホホイホイ」という掛け

声は交野節、歌亀節、平野節、浪曲音頭に共通したものである。

歌亀節も、交野節と同じく「七七」と「七五・七五」を基本にする音頭である。ただし場合によっては字余りや句余りを早口でメロディーに乗せたり、上の句と下の句とに切れないような唄い方をしたりすることがあり、歌亀節は交野節よりもひとつの唄の中で変化がもたらされている。

この変化について、村井（1994）は以下のように述べている。

毎節が定形の旋律である交野節は、それに合わせて盆踊りを踊っている分には別段不足が感じられるわけではないが、幕末頃になると、浄瑠璃や説教節、祭文やチョンガレなど、語り物芸能の流行普及の影響を受けて、農閑期などには座敷音頭というものが行われ出します。つまり、大きな農家の広い座敷などを借り受けて人を集め、ちょうど浪曲を聞かせるように、音頭の節に物語りを乗せて、読み聞かせる芸能であります。唄い物であるとともに語り物でもある芸能です。そうすると、一席の物語りに、3分や5～6分では済まず、20分ないしは40分も要するものが行われます。そうなれば、文句は次第に移り変わっていくが、節は毎節同じパターンの節（メロディー）の繰り返しが続くことになり、聞き飽きが起こります。この同じ節の単調な繰り返しを打破して、節使いに変化を持たせて、飽きられない音頭の取り口を開発したのが、明治初年のことですが、北河内は茨田郡の野口村（現在の門真市野里町）にいた、通称歌亀（本名は中脇久七）という音頭取りであります。⁴⁾

続く平野節は、歌亀節からは大きく変化した型式の音頭である。その構成は「七七」と「七五・七五」に加えて、さらにその後ろに再び「七五・七五」を続けるというものである。この時、初めの「七七」は上の節と呼ばれ、あとの「七五」の部分は順に下の節・返し節⁵⁾・下の節・落し節⁶⁾と呼ばれることとなる。この返し節が開発されたことで、一節の長さを自由に調節することができることとなり、リズムの違いはあるが、現代の河内音頭の中にもふんだんに活用されている。

浪曲音頭は、その名の通り浪曲⁷⁾の影響を受けた音頭であり、浪曲の地節のリズムに平野節を乗せて始まったものである。この音頭が生まれたのは太平洋戦争後すぐ、手近に行える娯楽として盆踊りが楽しめるようになったころのことだとされている。村井（1994）が「ナウいリズムの面白さに引かれて、戦前からの平野節河内音頭の音頭取りたちも、浪曲音頭に乗り替えるものが増え、江州音頭や他の音頭からも、これに転向するものが出て、新たな音頭人口も増えました」⁸⁾と述べたように、1965年ごろにはエレキギター・ブームを受けて新手的音頭取りが多く誕生したことと関西の浪曲陣による河内音頭の進出もあった上に、1970年代から1980年代にかけては中南米等のリズム音楽の若者への影響などもあって、さらに音楽性が多様なものとなった。これに合わせて和太鼓や三味線のバチ捌きも8ビートから16ビートへと早く細かいリズムをこなすようになり、ますますノリの良い音楽が奏でられているのである。また、構成は基本的に七五調か七七調であるが、整った型をわざとくずして変化をつけるために、字余りや句余りを作り、それを早口に乗せることによって口調を変えることが行われる。上の句と下の句の長さも一定ではなく、上の句

は多くの場合短めで2行か3行である一方、下の句は10行ほどの長さになる。この長い下の句の間に変化に富んだ節遣いを入れたり、節の付かないせりふを入れたりして、聞きどころを作っている。

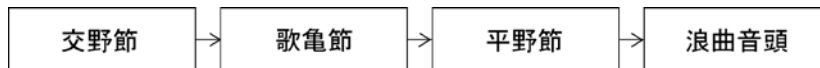


図1 現代河内音頭

出典：右田（1978）と村井（1994）をもとに筆者作成

(b) 江州音頭系の音頭

江州音頭は滋賀県発祥の音頭であるが、河内の地域に流入してから100年以上の歴史を持っており、河内の地域の中で独自の発展を遂げている（図2）。

村井（1994）の調査によれば、江州音頭が大阪で演じられるようになったのは1887（明治20）年頃のことであり、演芸の席で人気を獲得したあと、

1914（大正3）年の生駒トンネル開通時の盆踊りをきっかけに、江州音頭の盆踊りでの流行が始まった。そこから、江州音頭と河内音頭との2本立ての盆踊り大会が広まったとされている。また、大阪に流入した後に独自の発展を遂げて生まれた音頭としては、「平節音頭」、「江州音頭くずし」、「やんれ節」、「ヤンレー節」、「泉州音頭」、「改良節河内音頭」があげられる。

平節音頭は、江州音頭の節の中の祭文節⁹⁾や約節¹⁰⁾は使わず、平節¹¹⁾のみで構成される音頭であり、アマチュアが民謡的に唄うことが多い。江州音頭くずしも祭文節や約節を使わない点で平節音頭と同じであるが、浪曲の節などを使って江州音頭の形をくずしているため、さらに変化がもたらされている。

やんれ節とヤンレー節は似た名前をしており、どちらも「七七」を4つで一節が構成される点で共通している。しかし、やんれ節がメジャーの旋律の音頭であるのに対しヤンレー節はマイナーの旋律の音頭である上に、節回しや囃しの入れ方にも違いが見られるため、音頭を聴くとそれぞれは全く別物であることがわかる。

泉州音頭は、泉州の地域で生まれた音頭の総称であり、主な音頭に和泉音頭や和泉江州、改良節二口音頭などがある。このうち、和泉音頭については南河内にも音頭取りがいるが、他2つは泉州から音頭取りが来て河内で音頭を披露するのみである。

改良節河内音頭は、「河内十人切り¹²⁾」という事件について江州音頭を改良した節に乗せて演じたものであり、江州音頭から生まれた音頭ではあるが「河内音頭」の名称が入っている。江州音頭であれば七五調が原則となっているが、改良節河内音頭の場合は字余りや散文のようなものでも、平気で節の中に早口で読み込んでいた。村井（1994）は、この音頭そのものはリズムカルなものでなく聞きやすい音頭とは言えないが、当時の義務教育がまだ普及していなかった状況では新聞の代わりとなったこともあり、センセーショナルな事件の内容が大衆を惹きつけたとしている¹³⁾。

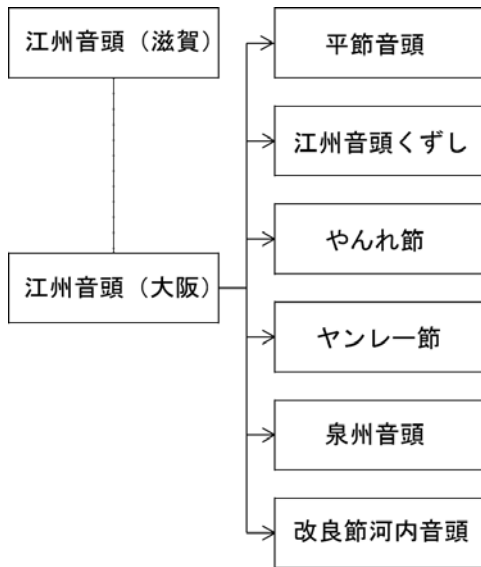


図2 江州音頭系の音頭

出典：右田（1978）と村井（1994）をもとに筆者作成

(c) 伝承河内音頭

伝承河内音頭とは町や村などの小さい地域ごとに発展してきた音頭である（図3）。発祥地の外へとわたることもあった現代河内音頭や江州音頭系の音頭と比べると、伝承河内音頭は狭い地域内で、主に発祥地の近辺において継承されている。また、昔から河内音頭と呼ばれてきた音頭だけでなく、現代になってから河内音頭とひとくくりにされるようになった音頭もここには含まれており、後者の方が数多く存在している。しかし、後者の中にはすでに消滅してしまったものもあるため、ここでは、今でも演じられており節回しや音頭の構成の情報があるものについて述べていく。

伝承河内音頭の中で昔から河内音頭と呼ばれてきたものは、「狭山・長野の切り音頭」と「流し節正調河内音頭」である。

狭山・長野の切り音頭は、大阪狭山市と富田林市の一部と河内長野市に伝わ

る音頭であり、「コリヤとかチョイトなどの間言を多く含む、キザミ口調で複雑な取り口の口説き音頭¹⁴⁾」である。また、この音頭には太鼓踊りという珍しい踊りがつけられる。

流し節正調河内音頭は、河内で最も古い音頭と言われており、室町時代に常光寺が再建される際、川を利用して材木を京から八尾まで運んだ時に歌われていた「木遣り音頭」が元になってできたと言われている。また、ずっと「流し」や「八尾の流し」と呼ばれていたが、昭和初期にレコードに吹き込まれた時に河内音頭の表示がつけられたことで初めて河内音頭の名をあてられたとされている。現在では七五七五調または七七七五調の音頭が演じられている。

現代になってから河内音頭とひとくくりにされるようになった音頭としては、各地の「半九郎節」、「ジャイナ節平音頭」などがあげられる。

半九郎節は、いくつかの地域で伝承されている音頭であるが、それぞれの地域ごとに異なった特徴を持っている。平野・加美の半九郎節と植松・跡部の半九郎節は、どちらも「七七」の上の句と「七七」の下の句で構成される音頭である。前者は上の句の終わりに「イヤヘーヘー」という掛け声を、後者は「ヘーヘー」という掛け声を掛けるという違いがみられる。また、大地・田島の半九郎節は一節が上・中・下の三部分に切れる河内音頭の中では珍しい構成の音頭である。老原・八尾木の半九郎節は後述するジャイナ節に似て、「ジャイナ」という間言が入る音頭である。

ジャイナ節平音頭はジャイナ音頭とも呼ばれ、八尾市南部から柏原市にかけての地域と、藤井寺市北東部に分布する音頭である。「七七」の上の句と、同じく「七七」の下の句で構成され、それぞれの1行目の最後に「ジャイナ」と

いう間言が入ることからこの呼び名になったとされている。古くからの音頭の多くは毎節が定形旋律であるが、ジャイナ節は「変わり節」を入れて毎節をどこかが異なる節使いにすることで、音頭の単調さを破る工夫がなされることがある。

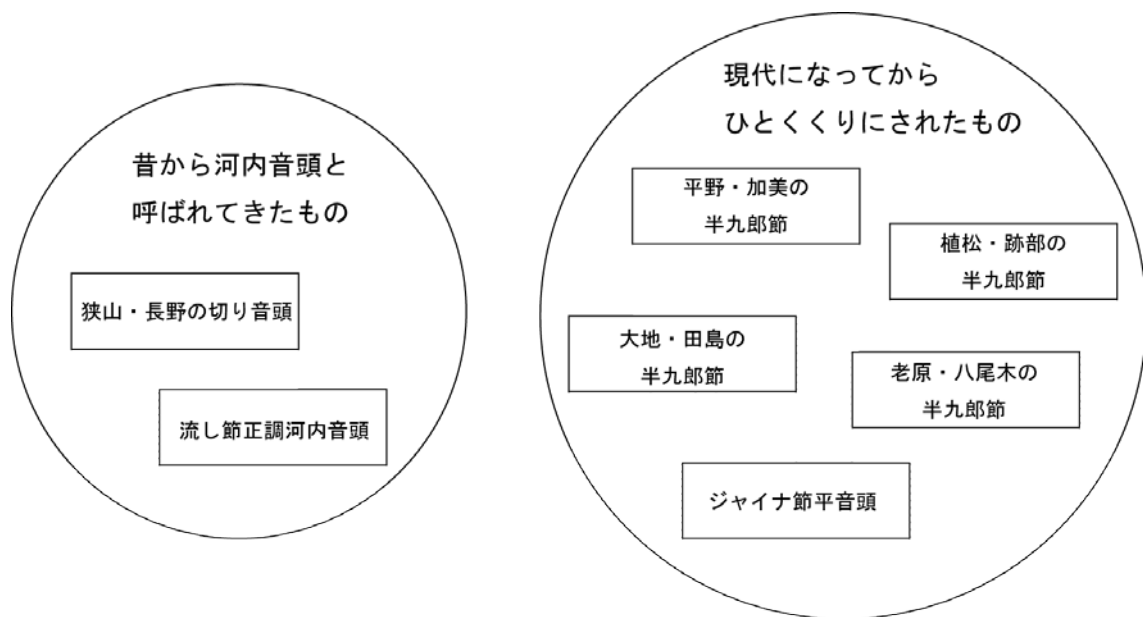


図3 伝承河内音頭

出典：右田（1978）と村井（1994）をもとに筆者作成

III 流し節正調河内音頭と保存会

1) 現代河内音頭の席卷

「盆踊り歌にも弱肉強食の自然淘汰があり、弱い音頭は強い音頭を受け入れ、一時的に共存したあと結局は消えていく¹⁵⁾」というように、河内音頭の中には現在でも継承されているものと立ち消えてしまったものがある。この「強い音頭」というのは、主に今の河内音頭の主流である現代河内音頭の浪曲音頭の

ことを意味しており、浪曲音頭が勢いを持つようになってからは、その先代にあたる平野節すらも食いつぶすこととなったようである。

また、II章で述べたように、伝承河内音頭にも消滅してしまった音頭が数多く存在する。例えば六郷音頭は、歌亀節が広まるまでは河内の地域に広く分布していた音頭である。1890（明治30）年代頃までは盛んであったが、歌亀節や江州音頭の流入によって衰微していった。そのほか、古市郡の半九郎音頭、羽曳野の念仏音頭、河内長野南部の畑音頭¹⁶⁾も他の河内音頭の流入や継承者の不足によって消滅したとされている。

その一方で、一度は姿を消してしまった音頭が復活することもある。例えば、II章の江州音頭系の音頭でも述べたヤンレー節は、一時期音頭を取ることのできる人がいない状況にあったが、鳴門屋寿美若一門によって継承されたほか、柏原市東部の雁多尾畑周辺の「ナンエン¹⁷⁾」「畑音頭」「ナッコレ」という音頭は近年まで途絶えていたものの、地元の堅上音頭保存会によって復活し、盆踊り大会で演じられている。

現在の祭りで演奏されている音頭は、自然淘汰から生き残ったか、あるいは住民の手によって復活した音頭であるわけだが、そこには「保存会」の存在が大きな影響を与えている。ここからは、流し節正調河内音頭保存会への聞き取り調査でわかった内容を中心に、河内音頭の中でも最も古くから伝わると言われている流し節正調河内音頭の保存会に焦点を当てて、音頭が地域で受け継ぐために行われていることについて述べていく。

2) 流し節正調河内音頭保存会の概要

流し節正調河内音頭保存会は、流し節正調河内音頭の保存を目的に作られた団体である。

保存会が結成されたのは 1952（昭和 27）年のことであり、ノリのよい河内音頭がすでに生まれていた当時は、ゆったりとしたリズムに合わせて優雅に踊ることが若者にあまり受け入れられず、踊り手が減り続けたために地元の人々が保存会を結成することとなった。そのころは「正調河内音頭保存会」という名前であったが、その後「流し節正調河内音頭保存会」と改称して今に至っている。

流し節正調河内音頭保存会を結成した後で、1973（昭和 48）年ごろに常光寺の婦人会が保存会に参入することとなり、その際にきちんと踊りの形を固めることとなった。もちろん、この以前からずっと音頭や踊りは続いてきたが、動きに個人差はあった。それが、保存会ができたことで今の形に統一されたのである。その当時に国立文楽劇場のこけら落としとして踊りを披露する機会があり、舞台できれいに見えるようにということで動きが統一されたという¹⁸⁾。流し節正調河内音頭を演じるにあたっては、「音頭はゆっくり、優雅で落ち着きがなければならない」、「踊りもしなやかにゆったりと踊らねばならない」、「音頭取り・囃子・太鼓の三つが一体となり、踊り子さんと合わない音頭は駄目」、「上記のことから、古い伝統を重んじ、自分勝手に節回しを変えることなど強く禁じられている」というような、心がけがなされている¹⁹⁾。

また、流し節正調河内音頭の成立について II 章よりも細かく説明すると、南北朝時代に八尾城を中心として起きた南北朝の戦いによって常光寺は荒れ果て

てしまったため、この地域の油豪商である又五郎大夫藤原盛継という人物が地蔵堂を再興しようとしたとき、將軍足利義満が材木を寄進したが、その材木を京から淀川や大和川を渡って運んできたときに船頭さんが唄う「木遣り唄」と従来から常光寺で地蔵菩薩を奉賛するときに踊られていた念仏踊りとがマッチしたのが、今に伝わる流し節正調河内音頭の原型になったと伝えられているということである²⁰⁾。

流し節正調河内音頭保存会には、2016年11月現在で音頭取りが11人、踊り手が35人所属している。また、音頭取りは男性で、踊り手は女性ばかりである。囃子には女性が参加することもあるが、女性が音頭取りを務めたことはまだないという。このことについては、音頭取りを務めるのは男性でなければならないという規則があるわけではないが、音頭に落ち着きが求められるため声の高さの点で男性の方がよいのかもしれないとのことである²¹⁾。年齢層としては40代～70代が中心であるが、20代の若い人もいる。流し節正調河内音頭保存会には参加したい人が自然と集まってくるが、踊り手に関しては入る人を待つだけでなく常光寺の婦人会の若い人に対しての勧誘も行っている。また、保存会には会長が1名、副会長が2名、会計が2名、幹事が若干名というように役職が決められている²²⁾。このほかに、常光寺の住職が顧問となり、必要に応じて流し節正調河内音頭保存会の指導と相談に応じることになっている。

参加条件は、会則に「本会は、常光寺の傘下のもと前条の目的に賛同し、相互の交流関係を深めるものをもって会員とする」、「本会は概ね、常光寺周辺の者をもって組織する」と定められている。練習が夜に行われることを配慮す

ることと、連絡の都合上、遠方に住む人はお断りすることもあるという²³⁾。また、流し節正調河内音頭保存会の参加者には常光寺の地蔵講もしくは婦人会に入ってもらい、そこで年間600円分の会費を納めることになっており、これを流し節正調河内音頭保存会の活動費に充てている。

この地蔵講というのは常光寺の世話役の団体であり、常光寺にお参りに来る人の世話をしたり、寄付集めをしたりする。講員となるには、「本尊地蔵菩薩を信仰奉賛する信徒であること」、「常光寺の布教活動、および儀式行事を催行するための奉仕と経費援助をおこなうこと」などの規定があるとされている²⁴⁾。戦前までは地蔵講ではなく初日講というものが存在していたが、戦時中にその活動は途絶えてしまった。しかし、終戦翌年の1946（昭和21）年、南海大地震により本堂・山門などが損傷を受け、修復のための資金調達が必要となったため、戦前からの熱心な信者有志が費用捻出のために立ち上がり、地蔵講として再発足したという²⁵⁾。さらに、常光寺の行事ごとが行われる際には事前の準備や当日のサポートも行っており、八尾地蔵盆踊りでは櫓の飾りつけなどを²⁶⁾、大般若会²⁷⁾でも寺の外周の飾りつけ、安全管理などは地蔵講が行っている。

普段の練習は、基本的に3月から11月の土曜日の夜に行われており、第1、第2、第4土曜日は音頭取りが、第3土曜日は踊り手が練習することになっている。踊り手の練習では音頭取りと合わせて踊る。7月、8月になると週1回ほどのペースになる。

このときの練習場所は、常光寺の敷地内にある音頭稽古場である。建物の1階は道具置き場で、2階が音頭稽古場となっている。1994年にこの建物がで

きるまでは、八尾神社境内の西郷会館で練習を行ったり、近所の公園でカセットテープを流して練習したりすることもあったという²⁸⁾。しかし、天候の影響を受けたり近隣住民から騒音の苦情を受けたりすることもあったため、新たに練習場所を作ることとなった。

音頭取りの練習では、まず昔の音頭が収められたテープを聴き、音頭のイメージをもつことから始まる。それから、口伝で伝えていく。村井（1994）によると「河内音頭には、決まった五線譜のような譜面が使われるわけではなく、音頭取りが同一人であっても、読みネタが違えば節付けも違い、また読み物の場面場面で、おのおのの節ぶしで、節付けの工夫がそれぞれ異なります」²⁹⁾とこのことであるが、流し節正調河内音頭の場合は自分で節のアレンジをすることは認められておらず、昔のままの状態を保存するための努力がなされている。

一方、踊り手の練習では、まず振りをひとつひとつ教え、その順番を覚えることから始まる。順番を覚えたら、踊りの輪の中に入り、周りの人の動きを見ながらさらに磨きをかけていく。また、この時に不自然な癖がついてしまわないように、できるだけ教える側の人注意をするようにしているという³⁰⁾。厳しい時では背中が曲がっているとだめ、上手でないといけないとしてイベントに出演できない人がいたこともあったが、今は出ることに意義があるという考えになってきている。

祭りの本番としては、毎年8月23日、24日に八尾地蔵盆踊りを開催している。7時から9時ごろまでは流し節正調河内音頭、それ以降は現代河内音頭が演奏されている。現在に伝承されている演目は、摂津国の崇禅寺の馬場で、末弟の仇打ちを試みた兄弟が返り討ちにあった事件を題材とした物語の「崇禅

寺馬場の仇打ち」、高安の長者の息子俊徳丸の流浪物語の「俊徳丸」、主人の娘と奉公人の悲恋物語の「悲恋お久籐七物語」、紙屋治兵衛と小春の心中物である「網島心中」、八尾地蔵と閻魔王との関係を題材とした物語の「八尾地蔵靈験記」、安産靈験に名高い八尾地蔵尊と藪医者を経験した物語の「八尾地蔵通夜物語」の6つである³¹⁾。また、戦前の地蔵盆踊りでは、以下のような風景が見られたとされている。

境内の中央に3間（幅5メートル四方）ほどの櫓を組み、四方の柱に青竹を立て、笹の枝に色提灯をつり下げ、お寺の門前には露天店が立ち並び、芝居小屋やからくり小屋が建てられ、大声でお客を呼び込んでいた。

また、お寺の本堂では施餓鬼法要が営まれ、老若男女の浴衣姿の参拝者でにぎわい、音頭取りはマイクでなく肉声で音頭を取られていたので、近所の子の迷惑もなく、夜どうし踊られていた。特にうまく唄われた音頭取りには、2メートルの御幣が贈られ、その他の人々には商品としてバケツやシャク、ザル等日用品が与えられた。³²⁾

櫓に笹を飾り付けたり、提灯を下げたりするのは今も同じであるが、今は夜通し盆踊りをする事や音頭取りに御幣や商品贈ることはない。また、昔は夜店も境内の中にあつたため中に入る人もその分多かつたが、現在は常光寺の外の商店街に夜店が並ぶため、子供たちはそちらに行ってしまう、境内の中までは入ってくれないこともあるという³³⁾。

さらに、8月7日には子供会と連携して「流し節正調河内音頭の夕べ」も行

っている。この日には、音頭取りや太鼓も含めて、練習を重ねた子供たちだけで流し節正調河内音頭の演奏を行っている。その他には、八尾市で最も大きい河内音頭の祭りである「八尾河内音頭まつり」に参加したり、「八尾河内音頭全国発信隊」として八尾市から依頼を受けて外部へ河内音頭を広める活動をしたりもしている。八尾市内の小学校に教えに行ったり、八尾市民に向けて開催される河内音頭講座に出演したりするほか、八尾市以外に向けて河内音頭を披露することもある。なお、このときの河内音頭は現代河内音頭のことを指しており、流し節正調河内音頭が披露されるのは基本的に常光寺の中だけである。

IV 流し節正調河内音頭が地域で継承される理由

1) 保存会の基盤「常光寺」

流し節正調河内音頭が長く継承されてきたのには、常光寺への信仰が大きく関わっている。ここでは、常光寺の歴史を紹介し、常光寺が今の流し節正調河内音頭の継承にどのような影響を与えているのか考察していく。

常光寺はもともと新泉新堂寺という名前であり、奈良時代の初めごろに聖武天皇の勅願で行基によって建てられたと言われている。八尾市内には他に聖徳太子ゆかりの勝軍寺や教興寺などの古くから続く寺院があるが、これらのような貴族仏教の寺院としてではなく、地蔵菩薩という広く庶民救済をめざす仏像を本尊とする寺院として、庶民に親しまれてきた。

南北朝時代には、常光寺への信仰をさらに深める出来事の記録がある。その内容は、麻疹と考えられる疾病が流行し、又五郎大夫藤原盛継という人物もこの病にかかってしまったが、地蔵菩薩の慈悲で救われたというものである。こ

のことがあった後には、以下のような状況となった。

河内国の守護・畠山義就の病氣平癒のため又五郎大夫が常光寺に祈願したところ、これまた地蔵菩薩の靈験で病氣が平癒し、そのお礼参りに常光寺へ守護が参詣した。このことから常光寺への信仰が一段と高まり、寺には地蔵菩薩の慈悲を求める人々の群、とりわけ不治の病や障害を背負うことで、家族をはじめ中世の人間社会に見放された人々が、ここ常光寺に各地から集まり、それらの衆生により寺には垣根のように列ができ、市をなす有様だったという³⁴⁾。

こうしてますますの信仰を得ることとなった常光寺は、室町時代の初めごろ、1389年に足利義満が当時の住職である通言和尚に「常光寺」と「初日山」の額を奉納したときから初日山常光寺と呼ばれるようになった。

江戸時代末期である1738年の諸国地蔵番付には、西の大関として常光寺の八尾地蔵が取り上げられており、伊勢の関の地蔵と大和の矢田地蔵と並んで日本の三大地蔵尊ともいわれている。また、狂言「八尾」という作品にも、この常光寺の地蔵菩薩が登場する³⁵⁾。

このようにして地域の人々に親しまれてきた常光寺は、現在でも行事の際には多くの人が集まる場所となっている。また、流し節正調河内音頭の盆踊りも常光寺境内で行われているが、このことは他の河内音頭の盆踊り大会との差別化にもつながっている。

河内音頭の盆踊り大会、特に行政が主体となって行われるような祭りは、小

さな地域で行う伝承河内音頭の祭りよりも大規模なものである。例えば、八尾市による「八尾河内音頭まつり」は、河内音頭の盆踊り大会や河内音頭グランプリが開催されるだけでなく、B級グルメや八尾市内の店の屋台の出店に、吹奏楽や大道芸、ストリートダンスコンテストの開催まで、河内音頭に限らずさまざまな催しを楽しむイベントとなっている。

しかし、祭りを楽しみの要素のひとつ、祭りの風景を楽しむなら伝承河内音頭の祭りに軍配が上がるだろう。常光寺の境内に櫓を組んで行う流し節正調河内音頭の盆踊りは、周囲を見渡しても山門や本堂、阿弥陀堂などの建物に囲まれており、なおかつ櫓からは提灯がさげられているなど、昔ながらの情緒あふれる風景を楽しむことができる。「目と耳の両方で、さらに楽しむことができる」³⁶⁾ということである。

同様に、浴衣を着て踊ることも昔ながらの情緒を感じることに繋がるといえる。流し節正調河内音頭保存会では揃いの浴衣を着用することになっており、昔ながらの風景とマッチすることに加えて動きの統一感もさらに感じられるなど、印象が大きく変わるものである。

以上のように、祭りの風景の面では流し節正調河内音頭ならではの魅力があり、常光寺があることによってそれが守られているといえるだろう。

2) 保存の意識

III章でも述べたように、流し節正調河内音頭保存会は流し節正調河内音頭を保存するという強い意志を持っている。このように音頭を昔のままの姿で残そうとするのは、保存会の名がついているのだから当たり前のことだと思われる

るかもしれない。しかし、河内音頭を継承していくために非常に大事なことがあるのではないだろうか。

もともと河内音頭の盆踊り大会は、参加者は自由に踊りの輪に出入りし、各自思い思いの踊りを楽しむものである。実際に踊りの輪を観察してみても、音頭が始まればまず中心部にいるベテランが節に合わせて動き出し、さらに外側の人々が集まって周囲の動きに合わせていく様子が見える。このとき、音頭によってある程度は踊り方が決まってくるが、全員がその踊りに合わせなければならぬものでもなく、踊り方を知らなくても見よう見まねで参加すればよし、アレンジを加えた動きで自分だけの音頭を踊ってもよい。そのため、現代河内音頭のようなリズムカルで、ノリの良い音頭と相性がよいのである。

また、現代河内音頭には多くの場合「手踊り」か「マメカチ」の踊りがつけられている。特に手踊りは、八尾河内音頭まつりの河内音頭グランプリでも多くの団体で使用され、「八尾正調河内音頭踊り³⁷⁾」と命名されるなど、八尾市の河内音頭においては絶大な存在感を放つ。

このことは、伝承河内音頭を保存するという点ではあまりよいことではないと考えられる。なぜなら、手踊りが推奨されればされるほど、手踊り以外の音頭の動きはわざわざ知ることがなければ昔のまま残すことが難しくなるからである。人によっては、河内音頭を楽しむためにみなが同じ音頭を踊れるのだから、伝承音頭を守ることにそれほどこだわる必要はないと考えるかもしれない。しかし、地域で独自の音頭をもつことの良さもあるのではないだろうか。

八尾河内音頭まつりのパレードや河内音頭グランプリでは、夏の昼間に長い距離を踊り続けることになり、普段の盆踊りよりも大変なことである。そのよ

うな時に知り合いが応援に駆けつけてくれていると、笑顔で応えよう、がんばろうと思えるという³⁸⁾。また、地域を代表する文化を発信する流し節正調河内音頭保存会が活躍してくれれば、地域としてもうれしいことである。

このように、伝承音頭を保存することは地域のつながりを強くすることにもつながり、地域のつながりが強くなれば伝承音頭の保存もしやすくなるという相乗効果が見られるのである。地域の音頭を保存することや、保存会が活動することで、さらに地域に一体感が生まれると考えられる。

3) 地域コミュニティ

ここまでで、常光寺があることで流し節正調河内音頭には昔ながらの情緒という独自の魅力があるということと、昔のままの音頭を保存することで地域のつながりにいい影響を与えるということについて述べてきたが、これらによって今後も流し節正調河内音頭を継承していくことはできるのだろうか。今まで継承されてきたからといって今後も継承されるかどうか、確実なことはわからない。ここからは、過去の地域コミュニティと現在の地域コミュニティの違いに注目し、流し節正調河内音頭をめぐる状況の変化について検討する。

まず、保存会の新たな参加者となりうる若者世代について考えてみる。今の流し節正調河内音頭保存会の中でベテランにあたる人は、若いころから長く続けてきた人も多い³⁹⁾。代替わりの時期や引退する年齢が決まっているわけではないため、基本的には自分自身が引退を望むまでは活動を続けるからである。その一方で、現在の地域の人々も若い間から加入することは難しくなっていると考えられる。その理由としては、ライフスタイルの変化があげられる。

現在ほど娯楽が少なかった時代では、盆踊り大会は貴重なレクリエーションの機会であったという⁴⁰⁾。しかし、現在は娯楽がより多様になっており、盆踊りに参加するという楽しみを持つ人の割合も減っていると考えられる。また、子供が音頭をとる祭りがあっても、それが保存会の参加者につながるわけではないということもある。かつてから女性は嫁いで地域を出ていくことが多かったことに加えて、現代では仕事をする女性が増加していることから、祭りなどの地域行事に参加できる人も減っていると考えられる。

さらに、地域コミュニティの組織の構成自体の変化についても考えてみる。常光寺の位置する地区には子供会から持ち上がりで入ることのできる団体がなくなってしまったということがある。かつては青年団があったが、存続ができなくなり消滅してからは、老人会に入るまでの間の地域コミュニティによる組織がすっぽりと空いてしまっているのである。そのため、地域のために何かをするという機会も少なくなっている。

このように、時代の変化によってどうしても人が集まりにくい状況となっている。それでも人を保存会への参加へと導くのは、今でも昔と同様に存在する、モチベーションの力が鍵となっていると考えられる。昔は音頭が上手い人には御幣が授与されたり、河内音頭のコンテストが行われる際には地域の応援を受けたりして、それがモチベーションとなった。現在でも河内音頭グランプリの際には同様に地域からの応援を受けることがあり、モチベーションになっている。また、流し節正調河内音頭保存会は河内音頭グランプリで殿堂入りを果たしており、そのことにプライドを持つことで、地域の人の応援に応え続けるような努力につながっている。

盆踊りを楽しむことや地域行事に出ることが当たり前ではなくなった今、伝承河内音頭を継承していくことは昔よりも難しくなるかもしれない。しかし、人が能動的に参加したくなるような祭りを続けていくことができれば、継承につながるのではないだろうか。

V おわりに

本研究では、古くから伝わる流し節正調河内音頭がどのように継承されてきたのかについて、河内音頭全体の変遷と流し節正調河内音頭保存会の活動とともに説明し、保存会の活動の中に芸能として維持されるための仕掛けや地域の人々のつながりを強化する仕組みがあるのかどうか分析してきた。その中で、河内音頭とは非常に多様なものであることや、流し節正調河内音頭保存会には常光寺という基盤があり、他の河内音頭との差別化ができていて、昔のままの音頭を残す流し節正調河内音頭保存会が活躍することでますます地域からの応援を受け、それがモチベーションとなってさらなる活動に向けて努力できることを主張してきた。また、昔と比べて現在は娯楽が多様化していることや、地域コミュニティの構造も異なっているが、モチベーションが鍵となり、活動が続けられていることを明らかにした。

しかし、地域の人々のつながりを強化するという点では以上のことが当てはまるが、流し節正調河内音頭保存会の活動の中に芸能として維持される仕掛けがあるとまでは、検討不足ではっきりとはわからなかった。ただ、改めて「祭礼の担い手」について考えてみると、河内音頭をはじめとする盆踊りの担い手は、先行研究で取り上げられていた鬮牛や山鉾、だんじりを用いる祭礼の担い

手とは性質が異なるということが言えるのではないだろうか。

河内音頭の祭礼では、音頭を取り手本となる踊りを披露する流し節正調河内音頭保存会のような祭礼の担い手と、その情景を楽しむ人々との間に、盆踊りの輪に参加する人々がいる。盆踊りの輪に参加する人は事前に練習を重ねなくとも、また河内音頭を一切知らなくても、輪の中に入って動き出せば盆踊りの輪の参加者、河内音頭を演ずる人の一部となる。祭りの情景を見ている人も輪の中に足を踏み入れさえすれば、簡単に河内音頭を見せる側になれるのである。この点で、鬨牛や山鉾、だんじりの祭礼では、祭礼の担い手と祭礼を見る人との間に距離があるといえる。

本研究は文献からの情報と流し節正調河内音頭保存会への聞き取り調査によって進められたが、他の保存会への聞き取りや、保存会の属する地域コミュニティへの聞き取り、そして河内音頭を見せる側となりうる盆踊りの見物人への聞き取りなど、調査の幅を広げていればさらに明らかにできることがあったかもしれない。また、IV章では客観的なデータに基づいて考察を行えばより説得力のある論を導くことができただろう。これらの点については、今後の課題としたい。

謝辞

この卒業論文を作成するにあたっては、流し節正調河内音頭保存会のみなさまに多大なるご協力をいただきました。練習のない日にも関わらず、お忙しい時期にお集まりいただき誠にありがとうございました。また、テーマ決めの段階から執筆に至るまで、山崎孝史教授には大変お世話になりました。

取りかかりが遅かったために、うまく執筆できずに悔しい点も残ってしまいましたが、無事この論文を完成させることができたのは、お世話になったすべてのみなさまのおかげです。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

注

- 1) 口説とは、一定の旋律に叙事詩的な詞を乗せて唄うものである。
- 2) 村井（1994） p.5 による。
- 3) 村井（1994）の呼称では「河内の音頭」の意。
- 4) 村井（1994） p.18-19 による。
- 5) 返し節とは、節の終わりを引き伸ばすことのできる旋律のことである。
- 6) 落とし節とは、節の終わりにくる旋律のことである。
- 7) 浪曲とは、三味線を伴奏に物語を語る芸能である。浪花節とも呼ばれる。
- 8) 村井（1994） p.27による。
- 9) 祭文節とは、浪曲の祖先でもある「貝祭文」という語り物芸能から取り入れた節である。あるいは、法螺貝による節のことを指す。
- 10) 約節とは、喜怒哀楽などの感情を表現するための特別な節である。
- 11) 平節とは、江州音頭の普通の節である。
- 12) 河内十人切りは、1893（明治26年）5月25日の夜中に南河内で起きた、色と欲のもつれから2人の男が10人の男女を殺したとされる事件である。
- 13) 村井（1994） p.47による。
- 14) 村井（1994） p.51による。また、「間言」は「あいごと」と読む。
- 15) 右田（1978） p.178 による。
- 16) 滝ノ畑音頭とも呼ばれる。
- 17) ナイエエンとも呼ばれる。

- 18) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 19) 流し節正調河内音頭保存会の資料による。
- 20) 常光寺のパンフレットによる。
- 21) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 22) それぞれの任期は2年であるが、再任することも可能である。
- 23) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 24) 田鍬（2009） p.178 による。
- 25) 田鍬（2009） p.178 による。
- 26) かつては櫓の飾りつけだけでなく櫓の設置も行っていたが、今は業者に依頼している。
- 27) 大般若会は、八尾地蔵盆踊りに並ぶもうひとつの常光寺の伝統行事であり、毎年4月に行われる。お練供養も同時に行われ、阿弥陀堂から本堂へと境内に設置された橋掛かりを練り歩き、本堂で法要を行う。法要終了後は再び橋掛かりを練り歩く。お練の行列は、赤鬼・青鬼・閻魔大王・楽人・稚児・七如来・地蔵菩薩・導師以下役僧・餅まき役の順で進む。一般的にお練供養には阿弥陀に随う二十五菩薩が登場するのが通例であるが、常光寺のお練では、常光寺ゆかりの地蔵菩薩や閻魔大王などが主役である。
- 28) 棚橋（1994） p.118 と流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 29) 村井（1994） p.41による。
- 30) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 31) 常光寺のウェブページ（<http://jyokouji.com/event/jizoubon.php>）による（2017年1月16日最終閲覧）。

- 32) 流し節正調河内音頭保存会の資料による。
- 33) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 34) 森田（2001） p.43-44 による。
- 35) 常光寺のパフレットより、あらすじを以下に記す。

「昔むかし八尾の里の住人で、生前一度も後生を願ったことのない不信者が死んで、冥土に旅立つことになりました。不信者は閻魔大王の審判で地獄におとされることが心配です。ふと八尾を立つ時に、常光寺の地蔵さんから閻魔大王にあてた手紙を預かっていることに気づきました。

初めは、なにがなんでも地獄へ落としてやろうと閻魔大王は取り合わなかったのですが、不信者が必死になって頼むので、手紙を開いてみると、昔なじみの地蔵尊からの手紙でした。

地蔵尊は『この者の親戚に大変な篤信者がいて、世話になっている。その人に免じてこの者を極楽へやってください』と書いていました。閻魔大王は『八尾の地蔵といえば、昔大変な美僧で、わしとことのほか仲が良かった。その地蔵の頼みとなれば仕方がない』と、いって不信者を極楽へ送るよう取り計らったとのことです。」

- 36) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 37) 2016年9月11日の第39回八尾河内音頭まつりでの発表による。
- 38) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 39) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。
- 40) 流し節正調河内音頭保存会への聞き取りによる。

参考文献

- 有本尚央（2012）：岸和田だんじり祭の組織論—祭礼組織の構造と担い手のキャリアパス—．ソシオロジ, 57-1, 21-39.
- 石川菜央（2004）：宇和島地方における鬮牛の存続要因—伝統行事の担い手に注目して—．地理学評論, 77-14, 957-976.
- 尾野尉子（2009）：正調河内音頭流し節．大阪府教育委員会文化財保護課編：『大阪府の民俗芸能—大阪府民俗芸能緊急調査報告書—』 啓文社, 154-157.
- 片岡英一（1982）：常光寺と地蔵信仰．河内史談会：『河内文化』 25, 10-12.
- 片岡英逸（2013）：流し節正調河内音頭考．岡野浩・西辻豊編：『大阪・八尾の都市創造性—市民知による文化実践分析と文化編集』（大阪市立大学 都市研究プラザ レポートシリーズ No.28） 大阪市立大学 都市研究プラザ, 93-94.
- 小谷利明（2008）：中世の八尾と常光寺．八尾市文化財調査研究会編：『八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要』 19, 13-29.
- 佐藤弘隆（2016）：京都祇園祭の山鉾行事における運営基盤の再構築—現代都市における祭礼の継承—．人文地理, 68-3, 273-296.
- 田鍬智志（2009）：常光寺の八尾地蔵お練供養．大阪府教育委員会文化財保護課編：『大阪府の民俗芸能—大阪府民俗芸能緊急調査報告書—』 啓文社, 176-179.
- 棚橋利光（1994）：常光寺境内に「音頭稽古場」新築．やお文化協会：『河内

どんこう』 44, 118.

棚橋利光 (2003) : 八尾地蔵のこと . やお文化協会 : 『河内どんこう』 70,

56-70.

長尾洋子 (2009) : 地域芸能の改造と博覧会的空間—越中おわら節の振付をめ

ぐって— . 人文地理 , 61-3, 1-20.

西川禎昭 (2003) : 流し節 正調河内音頭と常光寺 . 河内の郷土文化サークル

センター あしたづ誌 編集委員会編 : 『あしたづ』 5, 41-45.

右田伊佐雄 (1978) : 『大阪の民謡』 柳原書店 .

村井市郎 (1994) : 『河内の音頭いまむかし』 八尾市役所市長公室広報課 .

森田康夫 (2001) : 『河内 社会・文化・医療』 和泉書院 .

(20,173 字)